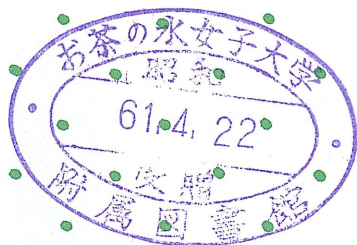


幼児の教育 5

1986

家庭・保育所・幼稚園

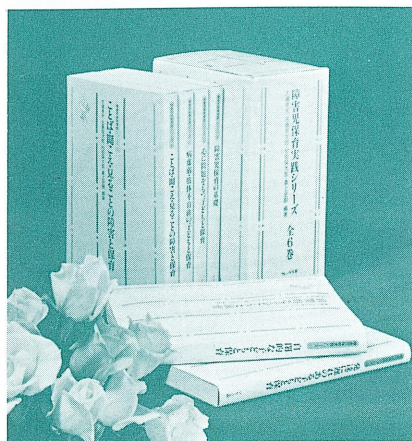


障害をもつ子の保育に必要な配慮はなにか？

豊富な事例、適切な助言、保育現場に役立つ実践指導書

障害児保育実践シリーズ 全6巻

大場幸夫・名倉啓太郎・村田保太郎・森上史朗 編著



本シリーズの特色

1. 障害児の発達の姿を共感的にとらえて、園での保育のありようを考えます。
2. 実際例をたくさん出し合って、具体的に指導のあり方を考えていきます。
3. 障害児ひとりひとりの個性を大切にする保育、人間としての育ちを大切にする保育を追求します。
4. 実践者のナマの声を通して、保育に必要な点を探ります。
5. 豊富な事例、適切な助言、保育現場に生かされることを目的とした実践指導書です。

第1巻 自閉的な子どもと保育

第2巻 発達に遅れのある子どもと保育

第3巻 ことば・聞こえ・見ることの障害と保育

第4巻 病虚弱・肢体不自由の子どもと保育

第5巻 心に問題をもつ子どもと保育

第6巻 障害児保育の基礎

A5判・セットケース入り 各巻平均264頁 セット定価10,800円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

幼児の教育



第八十五卷

第五号

幼児の教育 目次

——第八十五卷 五月号——

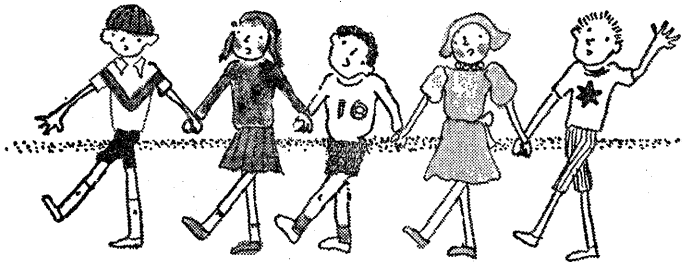
© 1986
日本幼稚園協会

伝承ゲームの国際会議に出席して……………中村悦子 (4)

藏前の保姆養成所をたずねて……………土屋とく (9)

SF的読み解き 子どもという風景第十三回
音無しの構え……………堀内守 (18)

幼児と共に五十年(2) 両親教育をめぐって……………齐藤芳子 (28)



兎園隨筆② いたいいたいのとんでいけ(その四)……………蕪木 寿江 (32)

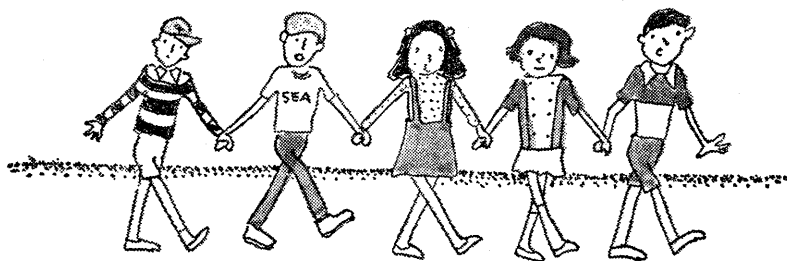
いろいろなことを教えてくれる子どもたち(II)……………村石 京子 (38)

若いおかあさんたちへ……………はるにれの会 (44)

犬になった子どもたち……………国吉 栄 (52)

存在とリズム……………津守 真 (57)

カット・福田 理恵
編集部・小澤 蒼子
土屋真美子



伝承ゲームの国際会議に出席して

中村悦子

フランクフルト空港で乗り換えたベオグラード行きの飛行機は、先ほどのジャンボと比べるとほんとに小さく感じられます。ウィーン上空を超えて二時間弱で、ユーゴの玄関に着きました。タクシーに乗るにしても、まずお金を交換しないと、と心細そうな顔の前に、ひげの青年の笑顔がとび込んできました。この度の会議を主催するベオグラード大学心理学研究所の学生スタッフで、私の手紙をみて待ち受けてくれたのだそうです。初めてこの地で不案内の身には、何ともうれしいことでした。

高層住宅の並ぶニューベオグラードを横にみて、中心部の古い町並をあとに、郊外の林の中に会場となる「子どものためのレクリエーションセンター」がありました。丁度、日

本の青年の家のようなたたずまいです。

ここで、この日（八五年一〇月九日）の夕刻から三日間にわたり、「伝承ゲームの研究プロジェクトに関するベオグラードOMEP会議」とでも訳される小規模な国際会議が行われたのです。

OMEPというのは、世界幼児教育機構の略称で、その目的は、「全世界の子供たちが家庭・教育機関・社会のあらゆる場でよりよい発達と幸せがもたらされるように、最適条件を用意すること」とうたわれ、現在、世界の四〇カ国が協力加盟し、日本も六八年に日本委員会を組織して加盟しています。三年毎に開催される世界セミナーには、日本からも多くの参加者があり知られています。地域別の会や今回のようなプロジェクト別のものもあることが分りました。

ベオグラード会議に集った人々は、名簿がないため人数等の確認はできませんが、ヨーロッパ諸国とカナダ、それに日本の十四カ国から二十名、ユーゴ国内から約三〇名、加えて五十名ほどでした。会議の目的は、「各民族・各文化集団には、各々に培ってきた子ども伝承ゲームがある。しかし、この変動する社会にあつて、その中のあるものは消滅の危機にさらされてさえている。伝承ゲームのもつ意義を考えるにつけても、それらを今、記録し集成する必要はないか、また、それらを教育の現場で、新しく活用する可能性はないか、これらについて討議をしよう」というものです。

この提案は、すでに一九七八年のヨーロッパOMEP会議に口火がきられていたそうで

すが、その後、OMEPのプロジェクトとして正式決定すると共に、ベオグラード大学心理学研究所が受けて、具体的展開のための理論的・方法的枠組を検討していました。この間、アメリカの遊びの研究者、サットン、スミスも助言者として参加しています。そして概略の出来たこの段階で、各国委員会からの参加を得て今後、計画を話し合うというものでした。

従って会議の日程は、大きく二つに分かれ、一つは、参加者の自由な短い発表、これには国外から八件、ユーゴ国内から九件あり、もう一つは、今回のテーマである国内的・国際的伝承ゲームの集成づくりについての長時間討議ととなりました。

私も「日本の伝承あそび研究と幼児園現場での活用現状」として短かい発表はしたものの、聞くだけで精一杯という力不足を感じつつの参加でしたが、印象深い点を一、二記してみよう。その一つは、幼児教育において、伝承ゲームを考える——収集・記録し、応用実践する——ことの意味です。遊びの重要については、ホイジンガーのホモ・ルーデンス以来、遊びの精神を人間の根元とする考え方をもとに認められています。また、幼児期の発達に、遊びが大きな影響を与えていることについても、ピアジェ、ヴィゴツキ一等の精神発達学からの知見も積み重なられてきました。更に、今、遊び、特に子どもの遊びが、文化人類学や記号論からの接近で新しい領域を開いていることを参加者の顔ぶれから知ることが出来ます。

ここで面白いことは、今回の表題にもあるように伝承「ゲーム」に視点があてられている

ることでした。日本においては、ほとんどの研究及び文献に、伝承あそびが使用されているでしょう。文化の中のゲームについては、すでに、J・ロバーツらによって通文化的定義（ゲームの五つの要因）（二九五九）が与えられ、比較文化の研究がなされています。

今日も、子どもの伝承ゲームを民族文化の一分野として位置づけていて、その定義とカテゴリー化の案が出されました。しかし、伝承ゲームに限定することによって出てくる問題点、特に幼児・幼児期の伝承あそびが大幅におちてしまうのではないかも論議されました。日本でいえば、柳田のいう「口遊び」そして「手あそび」の一部は、それに当たるでしょう。このようなことから、各文化の中で、子どもの伝承あそびを収集・分類しようとするときに、国際的な動きと合わせてみると見えてくる問題点があります。このことがまさに国際的な研究・討議の必要性をなしていくのでしょう。その意味でも、今日の発表にあったカナダの女性研究者ガルソン博士の「教育価値を主としたゲームと玩具の分類に関する国際文献の調査」の柱だては、注目したいところでした。

伝承ゲームは、身体活動をうながしたり、仲間との交流を必要としたりなど、子どもの種々の活動を刺激する豊かな可能性を秘めています。これらの遊びの経験が現代の子どもにも可能であるかどうかは、子どもをとりまく生態系の型と関連しているというのも、今日の主張でした。この点とも関連して、基調講演者であったベルギーの国立体育大学のR・ランソン博士の「フランドル地方の民族ゲームファイル・そのスポーツ史への応用」は、示唆に富んだものでした。まず、フランドル地方という文化の周辺において、民族性

を示すものとしての伝承ゲームの集成の実現過程に目をみはりました。それは、彼の所属する大学の体育史コースが、七三年から七四年にかけてのプロジェクトとして、"真のゲームとスポーツの考古学者"と称するような学生の養成にあたり、以来十三年の資料集積が、この「フレミッシュファイル」となって結実したことです。このゲームとスポーツの考古学者は、自らの生まれ育った地方の人々の間に宿入して共にゲームとスポーツを遊びながら資料を収集したのですが、この方法こそ、この地に四世紀前に生きて、農民や子どもたちの生活を描いた画家、P・ブリューゲルの「参加観察」の方法であるという比喻は心憎いものでした。

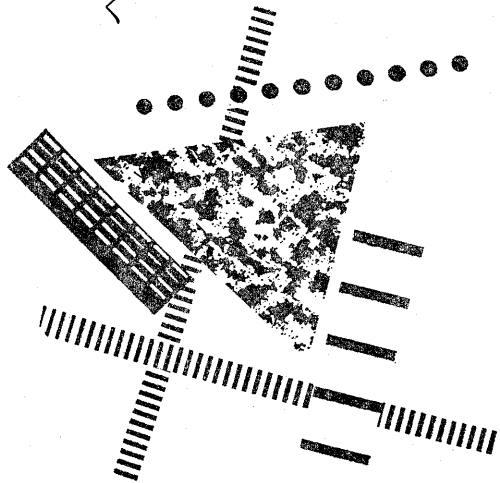
そして、この貴重なファイルは、大学の研究室にあるばかりでなく、一九七八年の国際児童年を記念した「民族ゲームと伝統的子どもゲームの一大展示」が野外博教室で実施され、以来、博物館内に恒常的に設置されていますが、そこにおける現代の子どもたちの参加の様子は、人間の遊びの経験の宝を、わがものとして楽しんでるありようそのものに見えました。

(大妻女子大学)

蔵前の保姆養成所をたずねて

——一台のオルガンから——

土屋とく



江戸川区小岩のつばみ保育園に古びたオルガンが保育室の片隅に置かれている。

YAMAHYAの商標がかすかに読みとれるが、かなりの年代を経ていまは使われることも稀である。

さきごろ八十三歳で亡くなられた前園長の荒木直高氏が友人の多田元一氏より譲り受けて若い頃愛用されたものだという。

このオルガンをめぐって奇しくも大正期の幻の保育養成機関をたずねることになる。

それは昭和五十四年初夏のことであった。

一章 探索

一 若き日の通学

多田氏はある時次のような件について荒木氏にその存

在を確かめたい意向を洩らされた。

姉に当る多田タメノ様——明治二十八年生——がふと「若い頃通った蔵前の保姆の学校は現在何という学校に当るのかしら」……

その言葉は荒木氏より更に土屋にもたらされ、併せてその頃の記憶内容をいくつか書きとめてある文書も手渡されたのである。

しかし既に六十数年前のことでもあり、また高齢ゆえ記憶も曖昧な部分が多いかも知れないがこの中から判断してほしいとのことであつた。

早速日本幼稚園史等を繰ってみたが、はっきり実在したと断言なさっている蔵前の保姆養成所はどの文献にも見当らず、それらしき記載内容も全く無い。その後、津守、坂元先生をはじめ幾人かの方々にお尋ねしても御存じないとのことであつた。

多田タメノ様の記憶

。小石川ノ春日町（文京区）近クノ餌幸町（富坂の境）カラ上野広小路ヲ経テ電車通りヲ既橋マデ二年間

通学シタ。当時コノ道ニハ市電ガ走ッテオリ、電車賃ハ片道五銭。往復デハ九銭デアッタ。シカシ経費ヲ節約スルタメニ下駄履キノ徒走デ行キモ帰リモ全期間通シタ。

。既橋迄行ツタノダガ養成所ヘ行クノニ橋ヲ渡ツタ記憶ハナク、スグ脇ニ一部煉瓦作リノ東京高等工業学校（蔵前工專といわれた現在の東京工大の前身）ガアッタ。

。養成所ハ木造デ狭ク運動場モ極ク狭イモノデアッタ。少シ遊戲ヲ教ワリ練習シタ。

。学校ハ公立デ授業料ハトテモ安カッタカ無料カデアッタ。但シ府立カ市立カハ判然トシナイ。私立デハナカッタ。

。入学資格ハ高等女学校卒業ガ条件デアッタ。ソノ学歴ハナカッタガ自分ハ生涯デ何カ公ニ認メラレル職ヲ持ツ必要ガアルト考エ志望シタトコロ入学ヲ許サレタ。

。ハッキリシナイガ校長ハ巖谷小波先生デアッタヨウ

ニ思フ。話ヲ聞イタ覺エガアリ偉イ先生デ驚イタ。久留島先生モイタ。

。音楽ハ山田耕筈先生ダッタ、学力ノ面デ苦シムコトガ多カッタガ特ニ音楽ハ全ク分ラナイノデ歌ウ時ハ仲間カラ外サレタ。

。ドウシテモ音楽ハツイテイケナカッタガ卒業証書ハ渡サレタ。シカシ自分デハ保姆トシテハ一人前デハナイト思イ生涯幼稚園ニハ勤メナイトソノ時決心シタ。

。養成所ノ生徒ハ少ナカッタ、同級生ニ林田サンガイテ本郷教会ニ通ッテイタ。

。音楽ノ練習ノタメオルガンヲ購入シ家デハヨク弾イタ、マタ姪達ニ讚美歌ヲ教エタ。

以上が文書の大要である。この時のオルガンが前記のものであり、タメノ様が後に大阪在住の間は元一氏の許に、更に度々の引越しを経て妹様の嫁ぎ先の香川県の長福寺にも渡っている由。多田家にとって由緒あるオルガンがまわりまわって保育園に贈られ現在に至ったという

わけである。

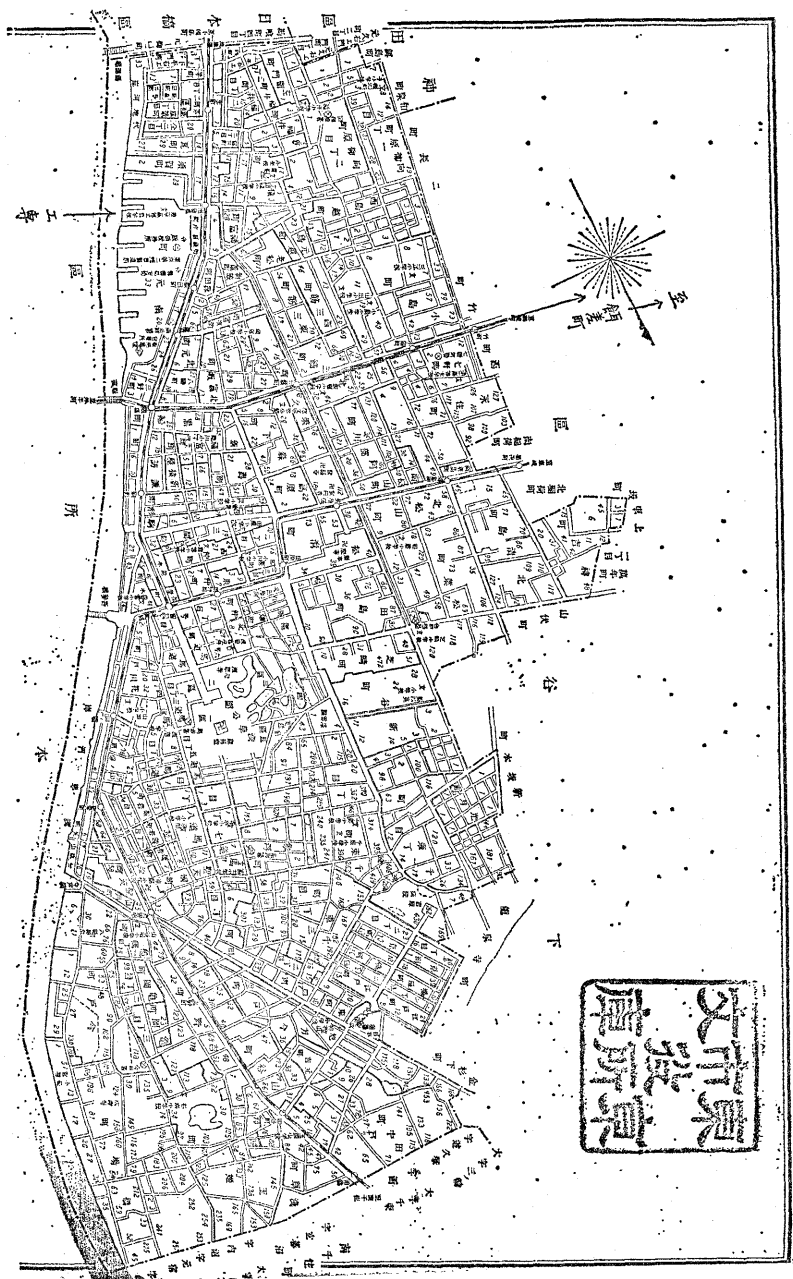
タメノ様は高齢のため視力や耳が弱られ、それでも新聞や本をよく読んでいろいろな事を知っていると共に話題にも出されるが、遠い過去の事を詳細に思い出すのは難しく問いつめると混乱しわからなくなるとのこと。

これ以上の手がかりを得るのは無理のようであった。

二 学校の所在の確認

これらの内容から時代を溯って事実との照合を試みる。現存したはずの学校の確認はまず限られた資料の中から所在を確定する作業から始められた。

特定の学校を指す場合、正式の呼称を使わずその所在地の名で学校そのものを表すことがよくあるものである。例えば東京女子高等師範学校は現在の医科歯科大学の所にあつたため「お茶の水」とよばれ、日本女子大学は「目白の女子大」といった風に……。したがって蔵前の保姆養成所も実在したのなら正式の呼称はほかにあり、何らかの記録の中にその痕跡が残されているに違いない。



地図
1

ない。

A 通学路からの追跡

学校の位置は通学した路と周辺の状況が当時のものと一致することが必要である。当時とは少女期から推定するところ明治末期から大正の初期にかけてと考えられる。

この時期の地図や資料は、資料そのものが乏しい上に該当地図が関東大震災、更に太平洋戦争の空襲と二度に亘る災害を被むっている関係上著しく制限されたものになる。

やがて東京都公文書館で——大正初期——「東京地籍地図」を探り当てることが出来た。

因みに地籍地図とは、ある土地の所有者は誰なのかその所屬を明確にするための土地台帳であり、公文書館担当者の言によれば震災前の詳細な地図的記録は現在これのみということであった。(地図1)

この地図で通学路を辿ると小石川餅差町から春日町の交差点(現文京区役所は砲兵工廠)を北へ向い——真砂

町——本郷——本富士——湯島を経て御徒町——更に西町——七軒町——森下町——八幡町に至り厩橋の手前で三好町との交差点となる。

タメノ様が橋を渡った記憶がないというところからすると、右折か左折かする筈である。

だがこの周辺に学校らしき表示は見当たらない。この地域のもっと詳しい地図がほしい。続いて各区別の地籍地図を調べると「浅草区」の中に果してこの交差点を右折してしばらくの左側に、一部煉瓦作りであったという東京工専「文」の表示がみつかる。

隣接の建造物は厩橋税務所 東京第二煙草製造所及び専売局支局 南元町署 東京電燈発電所等であつたらしい。

このあたりは江戸時代主要な運搬系路であった隅田川のはとりに幕府直轄の蔵が五十余棟並び立ち、その前に当る場所及び周辺を指して「蔵前」と言ったところである。そして維新後明治政府によって官有地となり国や公

(地図 2)



の建物が作られていったようである。

東京工專の所在は通学路から確認されたとはいえ、養成所はその隣接地にあったということであるから「文」の表示はもう一つなければならない。だが、この地籍地

図には一方が御蔵前片町の記名と空地があるばかりである。当該地区は浅草区南元町となるのでその部分地図を開くと今度はなんと東京工專の字も消えている。(浅草 8 南元町 地誌)

この線からの追究は完全に壁につき当ってしまった。

B 学務兵事記録から

一方その時代の学事関係の古い資料を明治から大正にかけて繰っていく。東京の公文書は達筆な筆書きで役所に届けられた書類にはきちんと整えられてあった。その中には学校の設立認可、採用者の氏名や勤務条件、月給の額などものっており、その頃の教育事情を知るには格好のものである。

しかし繰返し何度みても養成所関係のものはない。殆どあきらめかけたが猶もう一度と年代の幅を拡げて大正末期迄見ていくと何冊目かの綴りの中に次のようなものを発見する。

大正十四年 学務兵事課

市立学校 第一種 冊の十七

「柳北小学校狭小ノタメ位置変更届」この書類に添付されていた市街地図に、浅草区御蔵前片町二十三番地、即ち東京工專の向いに当る場所に明らかに「文」の表示がつけられているのである。敷地は長方形でさして広くは

ない。(地図2)

これで地図による所在の確定はほぼ間違いなく出来たといつて良いであろう。

推測するところ、この表示が養成所につながるかなり信憑性の高い解明の糸口になるのではないかと思われる。

ただAの地図が震災前のものであり、Bが震災後の地図であるという点で時期的な隔りとその間にあったであろう事実の推移は何なのか疑問は増したといつてもよかった。

三 柳北小学校と柳北幼稚園

さきの「文」表示は養成所そのものなのか関係の如何が次の課題となった。調査の場合は東京都の公文書館から台東区立図書館に移される。浅草区は戦後下谷区などと共に統合改名されており、資料はこちらに集められているからである。教育史、浅草区史の中から御蔵前片町二

十三番地所在の学校を二つ見つける事が出来る。一つは現在の蔵前幼稚園の祖に当る「柳北幼稚園」一つは都立台東商業学校につながる「柳北実技女学校」である。両者は共に柳北の文字を冠しているが、いずれも私立である。

前出の柳北小学校は同じ柳北であるが市立でその所在地は浅草区向柳原町でかなり離れた位置にある。―地図2参照―

この三者の間には何かつながりがあるのか全く別のものなのか事情を詳しく探ってみなければならぬ。

ここで時代は大きく明治初期に遡る。

明治三年浅草区に先ず西福寺（現清澄公園隣り）に東京府第五小学校が仮設され、後に浅草向柳原町一丁目四番地の元幕府医学館跡に移転し、松前小学校と改称された。そして同九年にその隣接地一丁目六番地に女子のみを収容する第五中学区十四番 柳北女学校が出来た。

この学校はやがて柳北小学校と改称するが、二十三年には校内の一部を保育室に当てて、「市立柳北女子尋常

（四年）高等（二年）小学校附属幼稚園」を誕生させている。園児は三十二名から始まり十一月には八十名に達したのが保育室を三室に増やし保母を三名置いた。更に次第に入園希望者が増し幼児百二、三十名となったのでそれ以上は謝絶する有様であったと記録にある。

明治三十年代の同区内の幼稚園は他には松濤町四十番地本願寺境内の私立德風幼稚園があるのみであった由、幼児教育に対する関心が高まった時期に当るのである。

同四十一年学制改革が行われ義務教育の年限が尋常小学校六年に延長、男女共学と定められたので、この学校はにわかに狭小になってしまった。高等科は切離されて精華高等小学校に集められたが、以上のような事情から浅草区議会は幼稚園を廃止することに決め、翌四十二年十一月三十日市立柳北附属幼稚園は失われる。

しかしながら盛運にある幼稚園を廃し、一朝にして幼児を解散させるのは教育上最も遺憾なことであると、当時の区議員や小学校長が発起人となって寄付金を募り新

たな幼稚園の設立と運営に尽力することになる。

この挙に賛同する人は多く蒔田、小川、杉浦氏の区議のほか長岡区長、三田校長また所有地を提供した安井氏の名と共に、区は従来使用していた器具機械等の園具はすべて無償で下附し事業を奨励したと記されている。

浅草区御蔵前片町二十三番地（現蔵前一ノ十）

私立 柳北幼稚園の創立である。開園は四十二年十二月一日 園児百五十名の出発であった。次で四十四年には女子教育の必要性から私立の柳北実技女学校がこの地に設立され、幼稚園は同校の附属となっている。

参考迄に述べると実技学校は修業年限四年 学級数四、学科は修身・国語・算術・家政・裁縫外九科目となる。しかるにこの学校はやがて経済的困難に陥り、大正八年社団法人 浅草区教育会に移譲され校名を女学校は浅草家政女学校に、幼稚園は柳北実技女学校附属浅草幼稚園。十一年には浅草実科高等女学校、同附属浅草幼稚園に変えている。

十二年東京地方を襲った関東大震災により両校園共焼

失、その後区画整理により換地復興の上再開 園児九名……。

長い歴史の流れのうちに幾多の変遷があり、戦後幼稚園は学校法人に、女学校は都立高校となるのである。

このように御蔵前片町の文表示の意味を尋ねていったが、女学校と幼稚園の存在は特定出来ても保姆養成につながると思われるものは出てこない。実科女学校の講義の内容をみても一般婦女子への教養科目の域を出ていないし、幼児教育を専門とする情況は何もない。まして入学資格である高等女学校卒業後の教育機関ではなさそうである。

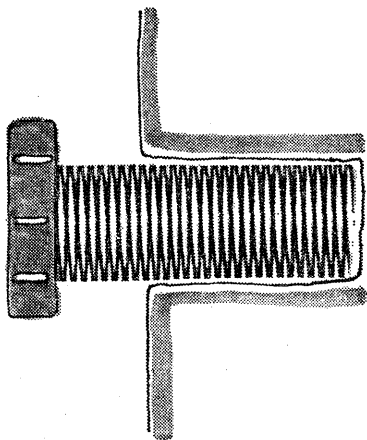
つながるかにみえた頼りの綱はここでまたとぎれてしまうのであった。

ただ養成所は公立（府立か市立かは定かでない）であり授業料は安いかわ又は無料というタメノ様の記述と、この柳北小学校関係が公立乃至は公立的性格の移動をみせているのが残された一筋の糸のつなぎ目と思われるところでもあったが。

（貞静保育専門学校）

第十三回 音無しの構え

堀 内 守



「音、ある？」

「は？ 何をおっしゃりたいのです？ あたしの店じゃ大ていの物は売っていますが、音は売ってはいませんね」

若い主人は、小さなお客の方をちらと見たまま忙しそうに品物を並べ変えている。小さな客は困ったように唇を噛み、店の天井を見

上げた。

「おれは音楽も好きだから、カセットだの、ディスクだの、音の出る品物は揃えているつもりだが、音そのものは売れないなあ」

主人は、気の毒そうな調子で言った。

「それとも、何かい。まだうまく言えないのかい。音、音なんかと言いたかったのかな」

「そうじゃないんです。この店では音売っていると聞いたものだからそれで買いに来たのです。ねえ、この辺

にそんなお店ないでしょうか」

「おれはこの辺にもう二十年も住んでいるが、音を売っている店があるとは聞いたことがないなあ」

若い主人は小さな客のそばに近寄ってきて、半分は自分に向かってそう語った。

子どもはていねいにおじぎをすると、「どうも」という一声を残して出ていった。

小さなできごとだったから、店の主人もそんなことを忘れてしまった。小さな客に馬鹿正直に対応したのがテレくさく思われたくらいだった。

数日たって、また別の子どもがやってきて、同じようなことを訊いた。

「音、ある？」

「やれ、やれ、またかい。このあいだも君と同じぐらいの年ごろの子どもが音を買いに来たよ」

「それで売ってやったの？」

「いいや」

「売ってはくれないの？」

「売る、売らないよりも、君たちのいう『売る』の意味がわからないのだよ。テープじゃなさそうだし、レコードでもなさそうだ」

主人は最後まで言わずに、こんど来た子どもを見た。服装は立派とはいえなかったが、まじめな顔つきで、何かを訴えたいように見えた。

「音を買ってどうする？」

「それは客がきめることです」

子どもはびしゃりと言った。そしてことばを続けた。言い過ぎだと反省したようだ。

「買って、しまっておくのです」

主人はまた訊ねた。

「しまう？ どうやって？」

世の中から音という音が消えてしまうのだとその子は真剣な表情で語った。小鳥のさえずりも、小川の水の音も消えてしまうのだという。

「へえ、おれが教えてもらいたいのは、なぜ音が消えてしまうのかという明快な説明だよ。まるで聞いたことも

ないぜ」

子どもは、足をばたばたさせて、じれったそうである。

「音なんかどうでもいいから、その辺にあると思うならみなもっていてもいいよ。録音でもするの？」

主人は、面倒くさくなったのでそう言い切った。子どもっぱいかかわりのなかに巻き込まれたくないと思った。別の客も入ってきて、レジのあたりに並びはじめた。その應對に忙しくなった主人は、少年が姿を消したのに気がつかなかった。

レジのキイを押そうとして、主人は妙なことに気がついた。レジがこわれたのか全然音が出ないのである。いつもなら、手ごたえのある音がする。ガチャンという音が聞える。しかし、今日はどういふわけか音も出ない。故障なのかも思ったが、機械の本体には異常がなさそうである。

客はだまってカードや現金をさし出す。そのことが主人の気にいらぬ。「やはり、ありがとうございます」

と口にしないと。主人はそれを口に出して言おうと思った。しかし、喉頭がいがらっぽくて声にならなかった。口がばくばくするだけである。客も同じだった。何か言いたげだが、音が伝わってこないのである。

突然出来たできごとで人びとはあわてはじめた。映画機のスピードを速めてフィルムをスクリーンに映したように、人びとはちょこちょこ歩きはじめた。

よく見ると、ふだんのスピードの二倍になったようである。歩いている人はいなかった。だれも小走りに走りまわっている。自動車も相当のスピードで走りまわっている。けれども音が聞えないから、あたりはまったく変わって見えた。

店の主人は、自動ドアに近づいた。とたんにドアはふだんの二倍のスピードで開いた。

まだ事態に慣れていない人は、ドアが二倍のスピードで締まるのを恐れて、そこに立ち尽くした。

「自分だけが慣れていないのだ。街頭の人びとはみなスイスイと走っている」

主人はそう心の中でつぶやいた。交通信号の切り換わるのも大変短かくなった。あんなに短かい時間内によく渡りきれるものだと思ったとき、この店を最初に訪れた子どもの姿が目に入った。交差点を渡ろうとしている。主人はその子を追ってみようと思った。しかし、街頭に出て行く勇氣は出なかった。

「おい」というように肩を叩かれたので主人はふり向いた。客が三人列になって、レジのところ待っていた。

主人は急いで戻り、「ありがとう」の代わりに、いつもよりも二倍ほどいいねいにおじぎをした。客もいつもよりは柔和な表情で主人に微笑みかける。そうしないと意志が通じないかのように。

思いがけないことを発見して、主人も客たちも少しは落ちついた。

窓から外を眺める。すると、外ではスピードが二倍になっている。しかし、ふしぎなことに、この店の中だけはふつうのスピードが支配しているらしい。音が消えただけである。どうしてこんな差ができたのか、主人には

わからなかった。

ドアがあくけはいいがした。ふり向くと、そこにいつかの少年が二人立っていた。この子たちに訊けば、事態の原因がわかるかもしれない。主人はそう思って、にこにこして迎えた。子どもたちも近寄ってきた。紙をめくって彼らは太い字で書いた。

「音をくださってありがとう」

主人は書いた。

「どうしてこうなったのか教えてくれ。声が出ない。外ではスピードが早くなっているようだし」

二人の子どもたちは顔を見合わせた。にっこりと笑ったものの、主人の質問に答えるけはいは見せなかった。そのまま外へ出ていき、二人の子どもは主人の視野から消えた。

新聞だけは毎日配達されてくる。おかしいことに、今回のできごとについては何も報じてはいないのである。しかし広告欄はまったく違ってしまっていた。

「声高騰につき、不要のものあれば買いたし」「あなたの声を保存します。冷凍にして十年後に利子つきで払い戻します。高利まわり、四分。複利計算」「交換したし、子どもの声と高齢者の声」

何やらすさまじい風景であった。

その日も一日、昨日と同じであった。夜、店を締めてから主人はお金の計算をした。銀貨も銅貨も音を立てない。シーンとした店の中にもう何日もいる。静かであるということはできなかった。何やら身体がふわふわしているような、逆にずっしりと重くなったような感じなのである。

音や声は出ないのか。出ても何かに吸収されてしまうのか。その辺がよくわからなくなった。外の風景は、夜にははつきりしないように思えた。外に出て、街の中を歩きまわってみたら、変化のあとが多少は理解できるかもしれない。主人はそう思ったりもした。

二人の子どもたちはごきげんだった。ここにはあらゆる

音が全部揃っている。聞きたいと思う音を聞くことができる。ボタンを押すキーボードが壁の四方に設けられている。

「小川のせせらぎの音が聞きたいな」

「じゃ、やってみるか」

二人は、いくつかのキイを叩いたり、ボタンを押したりした。

小川の音がきこえはじめた。だんだんと音が近づいてくる。

「ああ、いいな」

「うん、いいな」

「清らかな水の音、清流。淡水魚の棲む小川」

「さらさら、ちよろちよろ、さらさら、しゅるしゅる、びゅる、びゅる、びゅる。ああ、描写っていいな」

「でも、これだけでは繰り返しにすぎないだろう。もっと、別の編集ができないかな」

「そうやったら自然の味は変わってしまうのじゃないの」

「いや、編集し直すと、かえって自然がうまく表現されるのさ」

「ずうっと昔の音を聞いてみたいな」

「何を？」

「百年前のこの町のあたりにはどんな音があったのか。

馬のいななき、鶏の声、物売りの声」

言うより早く壁面のスピーカーからどこか間が抜けた音が響いた。

「何だ、これは。牛の鳴き声のようだ。しかも遠くからきこえてくる」

「人口が少なかったのだ。家もまばらだったからだろう」

物のわかったような言い方をしたのは背丈の少し高い子だった。

「ぼくたち、子どもらしくないことばを使っているね」
他方がそう応じた。

「この間からだよ。急に声まで変わってしまった」

「じゃ、この間よりも前のぼくの声もここに収録してあ

るはずだね」

二人は夢中になって索引を引いた。電話帳のような部厚い本には、こんなときの操作まで記されていた。

「あ、あったぞ、あったぞ。こうすればいいのか」

二人は手を叩いて喜んだ。このあたりはまだ子どものままである。しかし、その次の段階になると、二人はまるでおとなだった。術語をふんだんに使いこなし、声をかけ合って、機械を操作していく。

突然、声が聞えてきた。

「いやだよ、いやだよ、行きたくないよ。やーめたと」

それは、二人の表情に変化を及ぼした。

「あ、これはぼくの声のようだ。何をわめいているのか、聞き分けのない言い方をしている」

「たしかに君の声だ。それとくらべると、いまの君の声はずい分野太い声になっているね。まるで別人のようだ」

「君がおとなになってみようなんて言い出したのだぜ。」

それで音の買い占めに取らなかったのだった」

店の品物も底をつきはじめた。何しろ品物の補給ができなかったのだ。主人は、あの日以来、商品の仕入れに出かけていない。客も寄らなくなった。残り少ない品物を一カ所に集めながら、主人はひとりごとを言っていた。

「なにがなにやらさっぱりわからん」

そう言ったとき、屋根裏あたりでズシンと重い音がした。何か屋根に落ちたらしい。主人は気をつけながら階段をのぼった。屋根が破れ、そこからヘリコプターの残骸が見えた。あまりスピードを出し過ぎて浮力の調整に失敗したらしいのである。

操縦席には主人と同年齢とおぼしき操縦士が気を失っていた。「おい」とゆり動かしたが返事がない。何回か身体をゆり動かしているうち、目を開いた。そして「いやだよ、いやだよ、行きたくないよ。やーめた」と

とつぶやいた。その声はまるで幼ない子どものような声だった。

肩を貸してやり、階下に降ろしてやると、やっと元気が出てきたのか、外をきよるきよると見まわし、げげんな声をした。

「あれか、もうだいぶ前から、外の人びとは二倍のスピードで走りまわっている。大方君のヘリコプターも二倍のスピードでとびまわっていたのじゃないかね」

「二倍？ そんなことはないです。ちゃんと、規定通りのスピードを維持していたのだから。スピードを二倍にしたらコントロール不能になりますからね」

「あなたの判断力が二倍に増幅したとしたらどうだね。つまり、何もかもきっちり二倍になったとするのだ」

「だめですよ。全部が全部二倍になるなんて不可能なことです。たとえば、人間の身体をいまの形のまま二倍にしたら、もつと行動は鈍くなり、反対に大脳の働きは何倍かになるでしょうね。そのバランスを保つには身体各部分を再調整しなきゃならない。機械的に二倍にする

というのは不可能なのです」

「ヘー、ずい分くわしいね。あなたはエンジニアだったのですか」

「いや、全然別です。わたしは、一介のスポーツマンに過ぎないのです。操縦中、突然、空の一角が破れましてね。その破れ目の形が面白いものだから機をそこに近づけたのですよ。すると、どうでしょう。機はそこに近づくにつれ、急に操縦不能の状態になってしまい、ぐんぐんとその破れ目にひき込まれていきます。気がついたら、あなたの顔が見えたというわけです」

「空の破れ目、ですって？ これはまた異なことを承りますねえ。夢でも見ていたんじゃないですか」

「いや、夢を見ていたのではありません。それが証拠に現にこうやって、あなたと向い合っているじゃありませんか」

「そう言われればそうです。しかし、どうも変なのだなあ。空の破れ目なんて」

「ホントなんです。空が突然、破れたのです。その破れ

るのがスローモーションのようにひどくゆっくりしてしましてね。

こちらの世界からあちらの世界へ渡れる入口のように思えました。開口部なのです」

二人の子どもは、機械が作動しなくなったのに気がついた。

「あれ、おかしいな」

あちこちいじってみた。蹴とぼしてみたりもした。しかし、スクリーンには何も映らなかったし、何の音もきこえてこなかった。

大きな部屋と見えていたものが、急に小さくなり、ダンボール箱に変ってしまった。その箱に入って二人は遊んでいるのが発見された。

「危なかったなあ。ダンボール箱に入って遊んでいて、箱ごとクルマにつぶされた子どもがいるぞ」

おとなたちはそう言って、二人の子どもをたしなめた。

二人の子どもはそんな忠告のことはすぐに忘れてしまった。あのダンボール箱には見覚えがないのだ。音を集め、袋や空きカンに入れて、何度も地下室に運んだのだ。そのうちに、地下室のまわりの壁にスクリーンができ、片すみに置かれていた机の上に操作盤ができてきたような気がしたからである。だれが何といおうとも、あれをもういちど経験してみたい。二人はもういちど、あの店に出かけてみようとした。

ところが、どこをさがしても、あの店はなかった。

「こっちだったような気がする」

「こんな入口だったような気がする」

二人は何日もかかってあの店をさがし出そうとした。しかし無駄であった。決心も鈍ってきた。ちやうどそんなとき新しい遊びがハヤリだした。それに加わっているうちに、二人はそれに夢中になり、他のことをすっかり忘れてしまったのである。

何年かたった。

背丈の高い方の子どもは、海岸近くに店をもった。季

節によらず、よく客が入った。客は黙って入ってきて、黙って品物を買っていく。これが新しいマナーなのだろうか。店の主人はそんなことを考えていた。

暇なときには窓から外を眺めた。海岸ぞいの松並木をすいすいとツバメが通り抜けて行く。まったく軽やかである。それを見ると、主人は心のどこかで、あのツバメの飛ぶスピードを二倍にしてみたいという欲求が盛りあがってくるような気がした。

街頭をゆっくりと散歩している人びとは時間をもて余しているように見えた。もっとときばきと機敏に歩けばいいのにと主人は思った。彼は散歩というものがどんなものか知らなかったのである。

ある日のことである。妙な客が入ってきた。小さな子どもだった。顔に似合わぬ声で、

「音、ある？」

と訊いた。それはまるで「オートアール」というようにきこえた。

まさか「オートアール」じゃあるまい。そう思って主人

はその子の顔をじっと見つめた。すると、自分の口をついてだれか別の人の声がとび出した。

「はて？ 何をおっしゃりたいのです？ あたしの店じや大ていの物は売っていますが、音は売ってはいませんか」

主人は驚いて自分の口を手でおさえた。目を白黒させて天井を見あげたとき、屋根裏でズシンという鈍い音がした。

あわてて階段をかけあがってみると、何と屋根裏にヘリコプターらしき物体が見えた。操縦席には小さな子どもがぐったりとなって気を失っていた。

主人は、何回か子どもの肩をゆり動かしてみた。声もかけてみた。

すると、その子はゆっくりと目を開いた。

そして太い声でつぶやいた。

「いやだよ、いやだよ、行きたくないよ。やーめたっ

と」

主人はあっと驚いて気を失なった。その声がまるで自分の声そっくりだったからである。

何ヵ月かのち、主人はふたたび店を開けた。ちょっとした気分の動きで窓の外の風景は違って見えた。店内の掃除をすませ、レジ近くの椅子に腰をおろして一息いれようとしたとき子どもが入ってきた。静かに近づいてくると、ややためらいがちに、

「音、ある？」

と訊いた。

主人は、こんな場面を過去何回も経験したような気がした。そこでこう答えた。

「ええ、いろいろ取り揃えてあります。おききになりますか？」

子どもは大きくうなずいた。

(名古屋大学)

幼児と共に五十年(2)

——両親教育をめぐる——

斎藤 芳子

考えてみれば、幼児が幼稚園にいるのは僅

か四時間に過ぎず、二十時間は家族と一緒にある。幼児教育とは、両親や家族と共に、心を揃えて勉強していくべきものに他ならない。私は、長年そう考えて両親教育に力を注いできた。そのことをめぐって、私のやり方を述べてみよう。

幼児を見る目を育てる

P・T・A活動において、最も大切なのは、幼児を見る目を育てるための勉強会ではないだろうか。一年に一度、行事として有名講師を招く講演会ではなく、もっと身近に、継続的な勉強を積み重ねていくことが大切だと考えた。そこで、園長や教師によるP・T

・Aの園内研修会をくり返し、さらに、会員中の有能な人材を発掘して相互研究を試みた。私の園で実施していた両親教育の年間計画のうち、主なものを引いて説明してみよう。

(1) 「入園前保護者会」

幼稚園では入園前保護者会を開いて、幼稚園の歴史と保育の実際について話し、遊んで学んでいる幼児の姿の理解を求める。

行事などの時、同年齢集団の中のこともの遊び方、自立性、自発性、を観察してもらう。自分のことものの自己評価してもらう。

その後一時間位、お話と質問の会をして、両親教育の助けをしている。

(2) 「母の日」

幼児は、神より託された生命ある芸術品として、心をつくし、想いをつくして、一生懸命に育てあげ、よき成人として社会に送り出して欲しい。

幼児の入園と共に、P・T・Aに入会して、幼児の発達や心理、成長を勉強して、幼児教育に協力して欲しい。

幼児との関わり方や遊び方の中に、教育的配慮をし深い観察をして、子育ての深い喜びと生きがいを感じて欲しい。

そして何時までも、「お母さん ありがとう」と感謝され、尊敬される母として子どもと共に成長しようと呼びかける。

(3) 「父の日」

お父さんをお招きして、幼児の遊び方など保育参観の後、父と子の遊びの時間を持ってもらう。

お父さんへのお話として「教育の事は母親にまかせております」とのご挨拶はよくきく。社会のきびしい職務は理解出来るが「家庭のかなめ」として、家族の教育、躾にも意見をもち、家族の教育の相談相手になった

り、教育の指示が出来るように、幼児教育についても勉強してほしい。

こどもだけは、人にまかせず、話を聞いてやったり、一日一回は心のふれ合う時間を共有してほしい。

P・T・Aに出席出来なくても、放送、新聞などの教育、躰の番組などを選んで見るなら、相当の知識・教養は習得出来る。定年になっても「お父さん ご苦労さま」といたわってくれるような、心暖かい成人に巣立つよう、心を通わせて育てて下さいと望む。

(4) 「敬老の日」

祖父母を招いて、保育を見てもらう。

集団の中の自主的・自発的な孫の活動と能力を知ってもらってとかく過保護になりやすい老人にお話をする。

園児の祖父母はまだ若いのだから「敬老」に甘んじないで、「老人育ちは三文やすい」

などといわれぬように、勉強しようと約束し合う。今日見た孫の自立能力を信じて「気をつけよ、手をつけるな」の教育方針で、忙しい父母の子育ての助人になって欲しい。

絵本を読んできかせたり、童話を話してやったり、一緒に遊んでもらえば、幼児の情操教育・言語発達、心の安定のために、大切な教育協力者である。

現代の教育法、躰などもろもろの社会を勉強しながら、孫と共に成長し、孫からも話し相手として頼られるような、心豊かな老人でいてほしいと励ます。

以上のように、様々な幼児について勉強する機会を設けてきたが、何よりも重視したのは、実際に遊ぶ姿をよく見て貰って、その後で話し合うことであった。家族みんなが、幼児について共通の理解を持つこと、幼児も仲間に入れて家庭内の話し合いを試みる

ことなど、家庭生活を豊かにしていく上で要となることではないかと思う。

私が、特に関心を持ってきた「ことば」の問題にしても、根本は家庭にある。特に、三十年後の調査で、昔よりも幼児語や幼児発音が多かったのは、家庭内の人的環境の影響としか考えられないように思う。T・Vやラジオ、きれいな絵本など、物質的環境がこんなにも豊かになっているのに、子どもたちは、どこかで飢えているのではないだろうか。

幼児は、常に心一杯の感動を言い現わそうとして、乏しい語いを探しながら、しどろもどろと懸命に努力しているものである。しかし、そんな幼児に心くばりが届かず、心の感動を表わす力を養おうと、彼らの内面を見つめてみる機会が余りにも乏しいように思う。彼らの表現をゆっくりと受けとめ、耳を傾けてやること、一つ一つを大切に聞きとってや

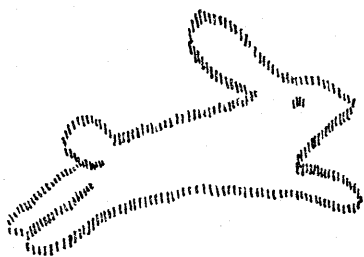
ること、歌ったり踊ったり、はね廻ったり絵を描いたり、それらはすべて子どもの「ことば」であると考えることなど、当り前のことながら、その当り前のことがすべておろそかにされすぎているのではないかと思う。

言語生活が発達しているように見えながら、何となく上すべりであるのも、家庭内での人と人のかかわりの薄さ、それがとかく表面的・上すべりに流れていることの現われかも知れず、また、それは、家族だけを責めるべきことでもなくて、社会全体の問題かも知れないだろうと、ことの重大さに愕然とさせられる。しかし、幼児たちの活発さと生命力に励まされて、何とか頑張ろうと明日の力が湧いてくるものである。両親たちに何よりも望みたいのは、「子どもと一緒に力を合わせてがんばってみる」という、そのことであるように思われる。

いたいのいたいのとんでいけ（その四）

「大事なものはお友達なの？

僕知らなかった」



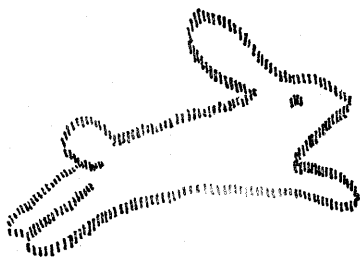
燕 木 寿 江

九月二十日

運動会の予行練習なので、役員のお母様方が大勢いらつしやう。行事の時はK夫は休んだ方がいいことを言うべきだった——と、思っているところを走ってきた。そして、うぐい白玉入れの玉を撒いて箱の中に入った。周りの人が困っている様子には無論気がつかないが、皆に迷惑をかけている状態の時は、本人にとっても決して気分がいいことではないので、「お部屋に行きましょう」と誘うと「どうしてもいけないの？」と聞き返すので「皆が練習ができないのよ」と言うとき、悲しい顔をして泣いた。そして部屋に閉じこもって一人で郵便局屋さんをしていった。（すまないことを言ってしまった、という思いでつかなかった）「玉入れの番がきたわよ」と言われて誘うと、すぐ部屋からでてきて喜んで投げた。籠の中に入れるのではなく、四方八方に投げた。

九月二十七日

積木にボール紙で「POST・OFFICE」と書いて張っ



て郵便局の続きをしていた。入口に「工事中、ここから入らないで下さい」と書いてあった。「何か、小包みはありませんか？」と聞いていた。友達がお誕生会でホールに言ってしまうと一人で粘土で小判をつくっていた。

「お弁当は郵便局で食べたい」と言うので支度をしてあげたが食べなかった。郵便局の積木の隙間が気になり、「どうしてここが開くの？」と涙をだして悔しがった。

すぐに直してあげると泣きやんだ。年少さんを抱っこしている。「僕も抱っこして——」と言うので「二人はできないわ」と言うと「じゃんけんしよう」と言った。K夫が勝ったので抱っこすると頬っぺをつけて喜んだ。

十月一日

砂場で高速道路をつくっていると、マイクで「十月のお誕生会の写真を撮ります」と流れてきた。K夫はすぐに「お誕生会のお菓子は？」と聞いた。食べる物に興味を持ったと言うことは素晴らしいと思って帰りにお母さんに話したが、あまり感動しなかった。部屋の中でも友達

が積木で高速道路をつくっていたら、さっと来て蹴とばしてこわしてしまった。「又、つくればいいよ」と言っても咎めなかった。K夫はダンボールになんだかわからないものをマジックで描いていた。「おんぶして」と言うのでおぶっているとその足で傍を通る友達を蹴とばして笑っている。「お友達が痛い、痛いって言っているわよ」と言う。「あなたは怒るからきらいです」と背中に張りついてるK夫に言われた。

十月三日

事務所で友達の切手を見つけたが「これいいですか？」と聞いてから貰っていた。友達が兎の餌に持ってきたパンの耳を見つけて袋の中から出して食べていた。パン屋さんのできたてのなので気に入ってかよく食べた。びっくりして見ている友達にも「おいしかったらどうぞ」と言っすすめていた。K夫は口に五・六本も一緒に入れておいしそうに食べていた。お母さんが迎えに来たが、今日もなかなか帰らなかった。「兎さんに郵便物を届け

ましよう」とお母さんが言うのと帰って行った。

十月五日

外で御神輿づくりをしていると、九時十五分に登園してから十一時まで花神輿のボンド係になってお花をつける役をやった。友達が「ボンド屋さん、お願いします」と言うとき真剣な顔であきずにやっていた。みるみるきれいな御神輿ができてきた。乾いてから「先頭がいい」と言っつかつぐ。

十月九日

玉子ケースを見つけて「これ使わないの？」と聞く。「どうぞ」と言うとき焼き卵屋さんになって屋台のように動かし「お醤油をつけて食べなさい」と言って繰り返し遊ぶ。郵便局でなく食べ物屋さんになったのは初めて嬉しい。先生が遊びの中にちょっと声をかけると長い間続けて遊べた。先生が御神輿で外に行ってしまうと、また事務所に行つて、ガラガラとどこでも開けている。

「お散歩に行く？」と声をかけるとすぐに「行く」と言
って先生と手をつないで歩いた。近くの公園に着くと砂
場に行ったり、お滑りをしたりした。お弁当は食べな
かった。食べ終った友達の鞆が木に吊してあるのを全部放
り投げた。木の根もとに置いてある鞆は集めて山のよう
に積んでしまった。「やらないで」と注意したのがいけ
なかったのか「帰る」と言うので送って行くと「この道
の木がこわい」と言って垂れ下がっている枝をいやがっ
て泣き叫ぶので、K夫の氣に入った道を通って行った。

十月十二日

NHKが取材に見える（3チャンネル、ことばの治療
教室）。皆が楽しそうにままことをしていたのでK夫も
一緒に遊べるかな、と思っていたのに、新しい屏風があ
ったらそれを持って馳りまわった。新しいものは落ちつ
かないのだな、と思った。（今日の録画取りの為につく
り直したのに——）M先生が「汽車のようね」と言う
と部屋から廊下から行ったり来たり何回も馳りまわって

た。友達が人形芝居の舞台をつくってやっているのに人
形を取りあげて放ったり、箱や、ざるを並べて舞台をか
くしてしまった。「先生、K夫ちゃんが」と叫んで
いたが、気かん坊の弟がまたいたづらをしたと言ったよ
うな眼で見っていた。「御神輿をかついでサイクリングに
行くわよ」と言うのと「先頭でなきゃいやだよ、お弁当は
食べないよ」と言って先頭になって歩いた。自転車置場
に着いたとたん、友達が来ないうちに猛烈な速さでお弁
当（スナック類）を食べてしまった。食べ終ると「帰り
たい」と言った。園に着くとすぐに「眠い」と言ってお
布団に寝てしまった。起きて冷たい水を一合半飲んだ。

十月十五日

砂場でお茶碗に砂を入れ、春・夏・秋・冬と順に少く
白砂をかけ「おいしい、おいしい、秋がおいしいですね」
と言って食べるまねを何度もしていた。部屋の中に入っ
ても「園長駅、砂場町、終点です」と言って「おかし
や」と言う看板をだして、アイスクリームのふたでつく

った飴を並べていたが、友達がいくと、「今日は定休日です」「今日は、飴を包む日です」と言つて友達を寄せつけないでいるのでお金をつくつて渡すと、にっこりして遊びが続いた。お弁当の時間になつてしまったので、「そおつとお引越ししましょう」と言つと「整理ができない」と言つて泣き叫ぶので「沢山あるといけないのよ、怒ばるといけないのよ」と話すと頬つべたをくつつけてよく聞いていた。抱っこしているとわかつたような顔になるが、降ろすとまた走つて物を集めだす。お弁当は欲しがらず先生がお茶をついでまわっていると「先生ってどうして忙しいの？ お願ひがあるのに——」と悲しそうな表情になつた。「帰りたくない」と言つとお母さんが「新しい切手が貼つてある郵便が来てるわよ」と言つて連れて行つた。幼稚園では切手は忘れてゐるのに——それ以上楽しいことが増えているのに——と、残念に思ひながら後ろ姿を見送つた。

十月十六日

「朝ごはんを食べるようになったんですよ」とお母さんが話された。稲刈りを見に行つたが、先頭でなくても、ともゆきちゃんと手をつないで歩いた。美しい自然の中にいるときのK夫はいつものようにしゃべらず、ゆったりとしていて眼もとがやさしかった。物のない自然の有難さをしみじみと思つた。自然は神か——。救われる思ひである。

十月十七日

九時五分、お母さんに帽子と鞆を渡してすぐに物置から黄色で一番新しい車をだし「あとはどうぞつかつて下さい。いらっしゃい、いらっしゃい、車屋さんです」と言う。石を持って買いに行くと「これはいけません」と言う。木の葉を持って行こうとしてゐると「どうぞ」と言つて赤い車を持って来てくれた。一周して返すと「どうぞ、ごゆっくり十分にお使い下さい」と言つて砂場に行き、友達が掘っているトンネルと一緒にやりだした。十時四十五分迄、黙々として遊んでいた。自分から外で

遊びだしたK夫を見て、職員一同喜ぶ。

十月十八日

帽子と鞆を部屋迄おきにきてすぐに砂場でお母さんとお山をつくって遊んだ。お母さんが帰ったあとも夢中でお山をつくり、隣にいたK子先生に「あなた誰ですか？先生ですか？」と聞き「一緒につくりましょう」と言つてトンネルを掘った。雨が降ってきたので「中に入りましょう」と言うと言くと泣くので、先生方で一人入れる屋根をつくってあげると、しばらくビニール袋に砂を入れては大きい山にしていた。父親参観日でお父様方がいらつしやると父兄のバッチを「僕が係りですから」と言つて靴箱の傍で「どうぞ、お取り下さい」と言つて渡したり、まだ来ないお父さんの名札を友達に渡して歩いた。「永楽」「名越」等も読める。

十月二十日

「昨日のプリントの残りが欲しい」と言つて例によつて

沢山事務所から持ってきたので、受取つて用水桶の上に置いておくのを忘れているように友達四人と砂場で遊ぶ。「印刷物は？」と聞くので「お友達が一緒の方が楽しいでしょう」と言う。「だって大事なもののなの」と言う。「大事なものはお友達なの」と言う。「お友達なの？僕知らなかった——、お友達なの？僕知らなかった」と繰り返していた。「お友達、大勢お家に連れて行つてもいいのよ。プリントじゃあお話しないでしょ」と言う。とそれには答えず「お友達が大事なもののなの」と、自分に言い聞かすようにではなく、新しい発見をしたようにまた繰り返して言った。

(神奈川・市ヶ尾幼稚園)

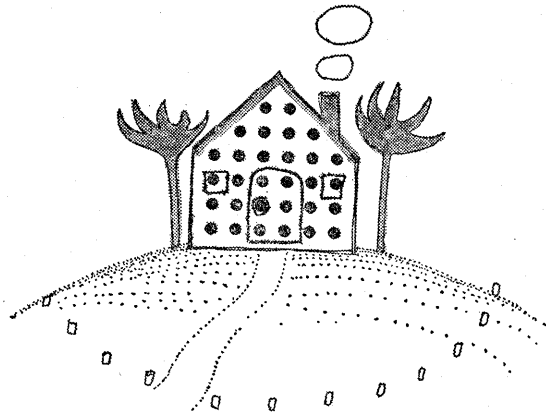
いろいろなことを

教えてくれる子どもたち (11)

村 石 京 子

○なすの実

私どもの園では毎年夏休みの間、毎日の生活の記録を母親につけておいてもらい、それを休み明けに担任へ提出することを続けております。この記録を読むと、子どもの夏休み中の健康状態や、家庭での過ごし方を知ることが出来るとともに、母親自身のものの考え方とか、子どもへの接し方などとも知ることが出来、随分参考になることが多くあります。ところが年長組では、今年はなすの植えてある鉢を一ケずつ夏休みに家庭に持って帰り



ました。このなすは、六月下旬に子どもたちが自分で土をつくって植木鉢に入れ、小さな苗を移植し、肥料をやり、支柱をたて、そして毎日水やりをせずと育ててきたものです。うす紫の花が咲くと、花が咲いたといっちは喜び、可愛い紫の実が結ぶと歓声をあげて報告してくれたりしておりました。

やがて早々と実ってつやつやの光沢をした幾つかのなすの実は、幼稚園で収穫して、おべんとうのときうすく切って塩もみをし、かつおぶしをかけて食しました。「おなすはきらいだよ」と言っていたT子もY夫もS子も、「幼稚園のは特別においしいのよ」の言葉につられて思わず箸が出て「おいしかったよ」と言ってくれました。N男とY子は「おなす、大好き」と言って「他のおかずはいらない、おかわりちようだい」と言った程でした。

そしてこの大切ななすの鉢は、夏休みになると夫々の家に持ち帰り、引き続き育てることになったのです。長い夏休みが終って、九月の二学期の始業の日には、夏休みの生活記録は夫々の子どものかいた絵表紙でとじて提出されました。この夏休みの間、子どもたちがどんな生活を送ったのかを知る楽しみと、読んでも読んでもなかなか半分も消化出来ない苦勞とを計りあいながら、一冊ずつ夜なべして記録を読むのでした。

今年は共通した体験として筑波万博に家族で行ったことの感想と、日航機事故の悲惨さを子ども心に感じとったことなどが書かれてありました。これは年長組の子どもたちが、社会の出来事に大分関心をもち、世の中とつながりをもつようになってきたことの現われ

であると思いました。そしてもう一つ、特筆すべきことは、持ち帰ったなすの話題です。

子どもたちは幼稚園から持って行った自分の名前のついた鉢をとても大事にして、水やりも毎日忘れず行なっていたということです。丹精の結果、嬉しい収穫があると「大事に仏様にお供えしてから、おみそ汁に入れました」という記録や、「幼稚園と同じようにしてと言われて、塩もみをこしらえて家中で食べましたが、先生の方が上手だったと言われました」という報告、「おばあちゃまがぬかずけが大好きなので、おばあちゃまのお家に届けましたら、とても喜ばれました」という人、そして八百屋さんの店で買って来たなすと合わせて素敵な名前のフランス料理が夕食に並んだことなど、いろいろな記録がたくさん見られました。「今までは何気なくスーパーの袋詰めを買っていましたが、一ヶ作るにもこれだけ手がかかることを親子で知ってよい経験になりました」という感想、「子どもが自分のおなすと言ってとても大事にしている様子を見て、ものを育てることの大切さを子どもから教えられました」という感想など、こちらの思っていた以上に子どもたちの一生けんめいな様子から、母親も一本のなすに気持を向けてくれたのがわかって読んで嬉しく思いました。

けれどもみな収穫があったわけではありません。「大事にしていたのに、風で折れて枯れてしまい、大へんがっかりしました。来年またやってみたいと親子で話しあいました」という記録もありました。「私の家では十ヶも収穫がありました」というH子の母からは「お花屋さんで聞いたら、この肥料が実のものにはとてもよいと言われました。もしまた何かを

つくるときには、この肥料をやってみてください」と効果のあった肥料の名前を知らせてもらったのも嬉しい心づかいでした。そしてさらに「花でも野菜でも育てるということ、よく見てあげることなのですね。よく見てみると、どんなものでもこちらの気持ちが伝わってよく育ちますね」と言われたことがとても印象に残りました。

目で見て育てること、毎日々々目で見て愛情を注いでいくことの大切さは、一本のなすでさえそうなら、子どもの場合には計り知れない程大きな意味を持っているといえると思います。一本のなすの鉢は、実以外にもいろいろな意味での収穫を私に伝えてくれました。

○かますの干物

十月の初旬、幼稚園の園外保育行事として、片瀬江の島海岸に親子で地引網をひきに出かけました。予定していた日が天候と網元の都合で延期になっていましたので、この日は是非とも、全員はりきって出かけたものです。そして待てば海路の日和かな、上げ潮に乗って引いた網の中には、近年にない大豊漁と浜の漁師さん達でさえ驚く程のかますの大群が入っていました。大漁に大喜びして、魚を配る私たちも威勢がよくなり、一同とても満足して帰りました。そして次の日の話題は、「昨日のお魚おいしかったよ」ということ

で、かますのフライやら、塩焼きなどが夫々の家の食卓をにぎわした様子がかがわれました。

それから何週間か経ち、もう地引き網のことも話題にならなくなった頃のことです。それは柔らかな秋の陽ざしが砂場にふり注ぐある日の午後でした。

先程から男の子たちは元氣よく砂場に水をためこんでいた様子です。水をたくさん使うと着替えなどもしなければならぬため、そろそろ帰り支度のための片づけを促がそうと思つて砂場に行きました。そしてふと見ると大きなシャベルなどをかけておく砂場キャリアの穴に、プラスチックの魚が一せいにぶら下つて陽に当たっています。「あら!」ちょうど通りかかったM先生と私は、顔を見合せて思わず笑つてしまいました。

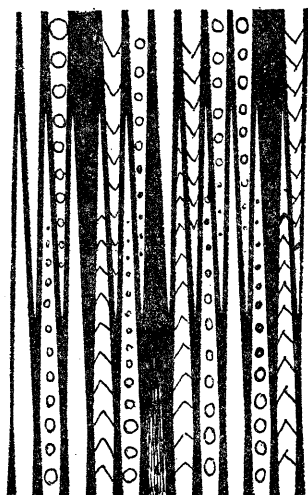
「これはきつとこの間の地引き網のときのかますを干しているのね。たくさんあったから干物にしたのね」と言う、魚を干して並べていたA夫は、満足そうににこつとしてうなずきました。子どもの体験は利根的であつて、その瞬間々に生きているという言葉も聞かれますが、一方では随分ときが経つてからでも、何かのきっかけでそのことをふと思ひ出したり、以前の体験が次の遊びをつくり出していく土壌となつてゐる場面を見ることがあります。

とかく現場では体験から活動へ発展させるということにねらいが集約されがちで、地引き網をするとすぐ魚屋さんごつことか、魚つり遊びなどといったように、大人が先になつて課題をつくつていく傾向があるのですが、子どもの中からふと出て来た小さなものの中

にも子どもの心が入れられているのを感じます。ともすると、大きな活動をつくり出していききたいと教師の気持は進みがちになりますが、小さなことの中にも子どもの体験がこめられているのを見落さないようにしたいものです。そして子どもは、自分自身で遊びに没りながら、何かを思い出したり、味わったりしているのです。そのことにも、私どもは気づくようにありたいと思うのです。

午後のゆっくりとした時間の中で見られた小さな活動でした。その遊びを見て、思わず笑みがこぼれてくる楽しい気持を味わったことは私にとっては忘れられないことです。

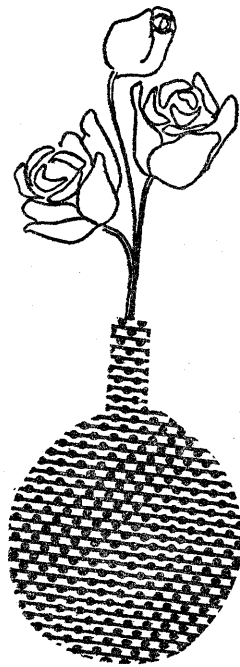
(お茶の水女子大学附属幼稚園)



若いおかあさんたちへ

はるにれの会

向山陽子



この紙面で皆さんにお会いするのも、二度目となりました。

前回お話したように、私は三十歳を過ぎる頃から子どもを無性に産みたくなり、子どもはいらないといった主人に、泣いて頼んで、主義(?)を曲げてもらって産んだ一人娘Mは三歳二ヵ月になりました。

私にとって、Mを産み育てることは、“はじめての経験であり、待望の子産み、子育てであり、そして、一度しかできない、たった一回きりの子産み、子育て”であると思っています。ですから、この一回きりの子産み、子育てを存分に楽しんいたつもりでした。

ところが、やはり、この“一回きりの子産み、子育て

て”という思いが強すぎて、母親であることを大義名分にして、妻であること、主婦であること等、他の役割を軽視していたようです。

母親（娘に対して）であるのと同じように妻（夫に対して）であり、同様に、娘（親に対して）であり、姉であり……そして主婦であり、嫁であり……。〔幼稚園教諭でもあったのですが辞めました。〕

「母親であること」は、私の体に変化して得た役割で、愛すべき我子との関係なので、大切にしたいけれど、子どもの成長につれて、囲りの状況の変化によって他の役割との比重を変えていくのだと気づきました。

娘が三歳になり、時おり見せる少女の片鱗に、畏れにも似た感情でドキッとし、私のものにはなり得ない娘自身に確実に育っているのを感じて、気づきました。

子育てを、抱いて育てる、手からおろして育てる、後ろから見守って育てると分けるならば、娘は自分の道を歩きはじめ、母親としては、口からついて出してしまう言葉在必死のみこみ、見守る努力をする時がきたのかも

しれない。娘の方から私の膝にとびこんでくるのを待ちわびる時が近づいてきたのかもしれないと心の準備をするこの頃です。

私の中には大きく占める「一回きりの子産み、子育て」から、私自身がもう少し開放されよう。「一回きりの子産み、子育て」は、私にとって、大切にすべき事実で、この一回のチャンスに、さまざまな事を考え、行動していくだろうが、今のうちに、私の全てをひきずりこんでいてはいけないうと、やっと気づいたのです。

いわゆる娘の自我の芽生えに触発されて、私自身も「自立」を、促された形となりました。

「一生懸命の、一回きりの、子産み、子育て」をふり返ってみると、私は母親のみになっていて、夫に対しては、まさしく、「くれない症候群」でありました。

恋愛からの結婚生活十年の私達夫婦にとって、この子産み、子育ての四年間は、男と女が父と母になっていく変化の四年であり、夫婦間に、微妙なずれを生じた四年でした。

夫は、働き盛り。（私は働かされ盛りと言う）

妻は、結婚前からの仕事を辞めた主婦一年生。

父親になりきれない夫への、母親になりきっている私からの不満。母親になりきってしまった、女も妻も忘れてしまった私への、夫の不満。

夫の帰宅は早くて十時、多くは深夜に及び、家では眠るだけで夫婦の会話など皆無に等しく、娘ばかりをかわいがり、私には優しいことばどころか、やることなすこと気にいらぬという顔をする夫への反発。

夜遅く帰宅すると、おもちゃも着替えた衣類も出しっぱなしで、娘と一緒に眠ってしまい、起きてはくるが、夕食の準備も満足にできておらず、私が仕事を辞めれば、夫へのいたわりが増えるのではとの期待は、見事にふられ、子どもにばかり夢中の私に対しての、夫のあきらめ。

そんな中で、私はますます日中の娘との生活にのめり込み、夫に対しては、「呼吸法、ラマーズ法を宗教だといつて全くうけてくれなかった。」「頼んでも、大きなお

なかをさわったり、胎内のMに声をかけてくれなかった。」「もう産まれそうな時も、又、乳児のMを抱いている時も、私を残して、さっさと先に歩いていった。」「生まれたばかりのMを、抱こうとしない。」「休日だけでも入浴させてほしいのに嫌がった。」「生後、三人の時を多くもちたいのに、休日に一人で遊びにいった。」「私に隠れて、他の女性と飲んだり、ドライブをした。」等。夫への不平不満がオリのように積もっていき、時には、寝入ったばかりの夫をゆすり起して、愛憎の感情を激しくぶつける私でした。

ある時、「夫に対しても母親の感情をもって接しなくては、男は父親にはなれない。」という言葉に出あいましたが、「優しくしてもらってもいいのに、そんなことはできない。」と、夫に対してはあくまで受身の私でした。

無性に再就職したくなった時もありましたが、その状況から逃避したいだけでした。

その状況から、私をぬけ出させてくれたのは、三歳に

なり、自分自身の道を歩きはじめた娘のMでした。

ある日の私の日記から。

・ ・ ・ ・ ・

Mが、私を見て育っています。

私が、母を見て育ち、反発しながらも、似た道を辿っているように。

夫へのさまざまな想いに、ひきずられている私ではなく、私の道を歩く私にならなくては。

Mが、Mの道を歩きはじめたのを感じてそう思います。

そうでなくては、二十年後、三十年後にMが又再び、私の悩みを悩むことになる。

三人家族、三人それぞれが、それぞれの道を歩み、傷ついたり、疲れた身を寄せあい、頼りあう場所としての互いの存在でありたい。

難しい。

が、精神的自立……です。

(61・1・27・35歳誕生日記す)

・ ・ ・ ・ ・

こう記せた日から、夫への“オリ”のような感情は、不思議にとけて消え、娘との昼の生活——公園や、お友達の家、時には我家が遊び場となる——にも、再び意欲的にとりくめるようになったのです。

又、昨年から少しずつはじめた、児童館での手伝い。朗読の勉強、奉仕。音楽会のナレーションの仕事。そして、はるにれの会の活動にも、張り切ってとりくめるようになりました。

子産み、子育てから四年。

職場を辞めて二年。

私は、この二つの大きな変化に、やっと対応できてきたようです。

私の体力が回復し、体力と共に気力も充実してきたこともあるでしょう。

地域のことも、住民としてわかりはじめ、人とのつながりも、生活、子育てを通したものとなり、住民として根づいてきています。

今の住まいには結婚と同時に住みはじめ、十年になるのですが、職場を辞める前までは職場と家の往復の毎日、地域住民としての意識はゼロに近く、「根づく」「生活」などという言葉には程遠いものでした。

多くの人がそうであるように、子どもを持って、衣・食・住の安全への関心も高まり、子育て仲間と話しあったり、より安心して生活できるための情報を交換しあい、助けあえるようになってきました。

この子育て仲間には、前述したような夫婦間のことも聞いてもらえ、

「向山さんは他の人には、寛大なのに、御主人には、どうしてそんなに心が狭いの。」

「旦那さんを大事にする程度に、落差がありすぎたんじゃない？ 話をきいていると、旦那さんが『あなたは変わった』というのわかるわ。」

「一生懸命、好きにならなきゃだめよ。」と悟してもらえます。

子どもの成長に関する事、衣・食・住の事だけでなく、夫婦の事、姑との事まで、心を許して相談でき、ぐちの言いあいではなく、優しく悟してもらえ、この子育て仲間は、私が職場を辞めた得た、最大の宝物です。娘のMにも、大切な仲間が、大勢います。〇歳〜四歳まで、十数名もいるのです。

毎日、朝十時になると、誰かの家へ遊びにいったり、誰かが遊びにきたり……。お天気のいい日は、近くのぞうさん公園へ。お昼になると、午後の約束をして、それぞれの家へ。時には、お弁当を持って公園や、どこかのお宅で昼食です。この子育て仲間は、ぞうさん公園で知りあったので、「ぞうさんの会」と、名づけました。

水曜と金曜は、お弁当を持って、ちょっと遠い、歩いて二十分程の児童館の広い公園に、全員集合です。冬の風の強い日も、館内を利用して続いています。夏は、噴水に水が入り、子どもたちも中に入って、存分に水遊び

ができて、大喜びです。

こうして、毎日、夕方の五時、時には六時まで、遊びこむ毎日が続いています。

そして、母親はお互いに子どもをゆだねて、用事をしたり、一人の時間を作ることもできるようになってきました。

娘のMも、この「ぞうさんの会」のおかげで、ずいぶん、成長しました。

私が職についていたため、育児休業明けの生後七ヶ月から、一歳四ヶ月で辞めるまで、Mを保育ママさんに預けていました。

生後七ヶ月というのは、人みしりの頃でもあり、その一ヶ月前から百日咳を患って、病みあがりでもありました。もっと早くから預ければ……又、もっと長く育児休業をとれば……という意見もありましたが、職場との関係、難産であった私の体力の回復などを考えると、これしかなかったのです。

そんな状態で預けられ、急にあわただしい生活に移り、母子関係もゆっくりとれない毎日でした。Mは、七ヶ月間、毎朝、私を泣いて追いました。毎日、私も泣きながらの通勤でした。

朝七時に起き八時には家を出る。夕方五時半に迎えにいき八時には眠ってしまうMでした。母子での時間は三・五時間。この間、食事、入浴、買い物で毎日が終わっていきます。

そんな母親との生活なのに、母親を追って泣き叫ぶ毎日でした。神経がビリビリしたMになっていました。保育ママさんが写してくれた写真には、つまらなそうに写っています。保育ママさんは「元気でしょう。」といいました。母親の私は、Mのもっと生き生きとした、いたずらっぽい目を知っていたので、その保育ママさんの言葉はとてもショックでした。保育ママさんは、「とても頭のいいお子さんで、私の要求をすぐわかり、すぐ応えてくれます。」といました。Mの気持が痛いほどわかりました。一歳なりにとても気を使っていたのです。

Mを犠牲にして、私が勤めを続けるわけにはいきませんでした。

私が辞めて、母子で公園に遊びに行くようになってからも、Mはビリビリした子でした。

神経の細い、消え入りそうな子だったとよくいわれます。

毎日の公園通い、母子でよく遊びました。でも、元保

育者の私が泣いている他の子の方を向いただけで、「ダメー」と泣いて、私にしがみついてくる子でした。

半年たった頃、やっとビリビリした感じがなくなってきました。

毎日、友だちと母子でよく遊びました。

一年たった頃、「Mちゃんてこんなにビビッドな子だった？」といわれるようになりました。

二年たった今、一人でお友達の家へ遊びにいけるまでになりました。

ぞうさんの会の、暖かいおかあさん達、子どもたちのお陰です。

これからも、この会のお友達を大切にしていきたいです。そしてこの中で、Mも私も成長していきます。

私が職場を辞めたのは、今のようなMの状態が最も大きな原因でしたが、やはり「一回きりの子育て」を、自分の手ですてみたいという欲求が、大きく働いていました。

できれば、続けたい職場でしたので、いろいろ保育園を見て歩きましたが、結局、満足のいく園が見つからず、「私が育てれば、ああもできる、こうもできる。」「集団だとしても指導の名のもとにも、不自然さや、管理の影がちらちらする。」という思いが残るのでした。

例えば、砂場で興がのつてきた時に「○○ちゃん、ごはんですよ。」の声がかかったり、

昼寝をしたくないのに、寝なくてはいけなかったり

……。

一回きりの子育てだから、トイレットトレーニングも私がやってみたいし、服装も半ズボンのみと規制される

のではなく、自分で選ばせてやりたい、等。

また、自然がいっぱい残っている練馬に住んでいるのだから、母子で存分に季節の移りかわりを楽しんで生活したい。職場と家の往復で、私に地域に足場がないように、保育園と家の往復だけでは、生活に幅もなくなるのではないか、という気持ちもありました。

母の懐、家の中、近所、地域と、徐々に生活を広げていってやりたいという思いもありました。

そして、決定的だったことは、水遊び、泥遊び、切り紙やのり、えのぐ等、ごちやごちや、ぐちやぐちやした遊びを存分にさせてくれる園がみつからなかった事でした。

もしも、思いきり、太陽を浴び、水と泥に全身をゆだね、泥んこになりながら、キャッキャッと笑い声をあげている子どもたちがいる保育園をみつければ、草木や、鳥や、雲たちと友達になり、空想の羽を思いきり飛ばして遊ぶ子どもたちがいる保育園をみつければ、

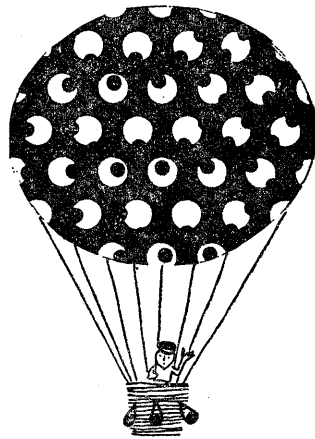
Mをその園におまかせして、一回きりの子育てをその園に托せたかもしれません。

でも、理想の園はみつからなくてよかったのです。

私は今、娘が豊かな幼児期をすごせるように、夫が安らげるように、仲間のいるこの地域で生活することが、私を豊かに、成長させてくれる、といえるようになりました。

犬になった子どもたち

国 吉 栄



以前、友人が、「犬こっこについて」*という短い文を発表したことがありました。それまでそのことにほとんど注意を払ったことのなかった私には、その文がとても新鮮に感じられた記憶があります。

ところが昨春、新しい職場に移った私は、思いがけずも、そこで嫌というほど犬になる遊びを見、また私自身そこに参加することになってしまいました。

私どもの園は、四歳児・五歳児あわせて四十数名、そのほとんどが女児という変則的で小さな園ですが、昨春、大きな異動がありました。保育者全員が入れ替わり、私と、新卒

の若い二人の保育者とが跡を引き継ぐことになったのです。

意気込みはあっても、いささか心細い旅立ちでした。こうした私どもにとって、入園式で初めて出会う新入園児とは違い、旧年度中に何度か一緒に過ごした進級組の子どもたちは、親しみもあり、また頼りになる存在でもありました。けれどもこのように緊張して新しい事態を迎えたのは、私ども大人だけではありませんでした。旧年度から持ち上りの年長児たちにとって、四月からの園生活は、彼らの存在を危くするほどの、全く新しい体験だったのです。

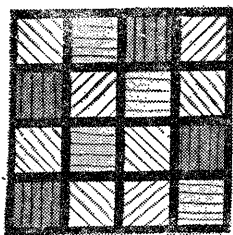
私どもは子どもたちが生き生きと遊ぶ保育をしたいと願っておりましたが、自由に遊ぶ時間が長くあっても、思い思いに遊ぶ新入園児と対照的に、年長の子どもの多くは自分たちで遊ぶよりも大人の傍にいたいことを求めました。長い間、私ども保育者の身体は、年長児をおんぶしたり抱っこしたりでいつもふさがっていました。全く新しい先生。今までと違う保育。中でも子どもたちが特に気にしたのは、座席や並び順が決まっていなかったことでした。それまでは自分の名前が印された椅子で、決められた机に、決められたメンバーで座ることになっていましたので、これは実に彼らの存在基盤を揺るがすことでもあったのです。こうした中から自然に出てきたのが犬遊びでした。

四月下旬のこと、数人の子どもたちに絵本を読んでいると、一人の女児が手も床につけて、「クンクン、私は犬です」と言いました。「かわいい犬ですね」と言って頭を撫でると、彼女は足元にうずくまりました。絵本を読んでもらっていた子どもたちは足元に割り

込まれて迷惑そうでしたが、私は、「犬なんですって」と言つて、絵本を読みながら時々頭を撫でていました。その子はすっかり、おとなしい犬になりきっているのです。

ある日気がつくと、保育室のそここに、犬になって歩いている子どもたちがいます。時々、キャンキャンとかニャアオとか言っています。両手を頭の上にあげて跳びはねている子どももいます。彼らは犬や猫や兎になっているのです。私は一瞬胸をつかまれましたが、これは彼らが自ら始めたほとんど初めての遊びであることを思い、私も四つん這いになって一緒に歩きました。

そのうちに一人の女児が輪投げの輪と縄跳びのひもを持って来て、「結んで」と言いました。輪にひもを結ぶと首にはめ、「先生持つていて」と、ひものもう一端を差し出します。私がそれを受け取って歩き出しますと、その子は犬になってついてきます。すると何人もが「結んで」と、ひもと輪を持って来て、たちまち何匹もの犬のひもを引いて歩くことになってしまいました。犬になった子どもを手綱で引いて歩くこと、はた目にはワンワン・キャンキャンと賑やかなことですが、大人にとって、本当はとてもつらいことです。私は自分でその役を引き受けたくなくて、何とか逃げようと思いました。そばにいる子どもに、「この子を散歩させてやつて下さい。おとなしい犬ですから」と言つてひもを渡すと、「先生じゃなくちゃダメ」と、犬になった子がひもを引っ張って取りかえします。できるだけ遊びを広げたくてままごとコーナーに連れて行き、「ここでお食事をいただきますしう」と言つても、彼らの関心は相変わらずひもで引かれることにあるのです。ピヨピヨ



ン兎になって跳ねていた子どもまで「先生ひもつけて」と言いに来ます。「あら、うさぎは首輪はつけないのよ」、「じゃあ私、犬になりたい」。いつの間にか猫や兎までが首に縄をつけて散歩することになってしまふのです。

こうしたことが、来る日も来る日も続きました。六月初旬から中旬にかけての保育参観の頃、この状態はピークを迎えていました。我が子が首輪をはめられ、ひもで引かれて四つん這いで歩いている姿を、お母様方は何とお思いになるでしょう。私はためらいましたが、けれどもそれがその時の保育の現実でした。私はほとんど泣きたい気持ちで、何匹もの犬のひもを握って保育室を歩きました。

ところが、夏休みを前にしたある日のことでした。私は犬がひもなしで歩いているのを見たのです。「ねえ先生、犬がひも無しで歩いているわよ」。私は感激して同僚に伝えまし

た。子どもたちはとうとう自分の意志で歩く犬になったのです。と同時に、それまで常に何人かが保育者のひぎに乗ったり、背中にしがみついていたのに、いつの間にかそういうこともほとんどなくなってしまっていたのです。トンネルを一つぐり抜けた、という実感がありました。

それ以来、大人にひもを引かせて歩く、犬遊びは全くなりませんが、犬になることは、その後も形を変えてとぎれながらも彼らの卒園まで続きました。二学期になってからは、ままごとの中で子

どもが引いて歩くのを見かけることがありました。また、椅子で作った犬小屋の中にままたごとの枕を置いてうずくまり、頭の上に「だれかかってください」と書いた紙を立てている女児がいました。次にそこを通ると、シーツの上にもう一匹犬が寝ていて、「ふたりいっしょにかってください」という札が立っていました。誰かこの子たちを引き取ってくれる人がでくれるように、私は心から祈りました。もう大人が飼うことはできないのです。

犬になること。その意味の重さ。一年たった今、彼らのあの犬遊びは、ただ保育者が変わったから、保育が変わったから、というだけのものではなかったと強く感じます。それがきっかけであったことは確かなのですが、園生活を超えて、犬になることは子どもたちの丸ごとの存在そのものに共鳴するものであったに違いありません。

犬。犬になること。小学校に行ったあの子どもたちは、もう犬になることはできません。今、彼らはそれをどのように表現しているのでしょうか。気にかかります。

(*) 小宮山雅代 横浜市幼稚園協会鶴見支部

研究集録 昭和56年度 35頁

存在とリズム

津 守 真

存在とリズム

青空の下で、気持のよい風の吹くとき、Hを抱いてリズムを口ずさみながら揺っている、Hは笑いだす。ブランコにHを坐らせ、軽くこいでいると、Hは足をつっ張って少し

こぐ。しばらくするとブランコからおりようとするが、足が地面につかず、すぐにひっこめる。自分の身体のまわりとごく近い空間だけが全世界のようなHにとっては、ブランコから足を下ろしても地面につかないときは、谷底におりるように感じるのかもしれない。

その存在が身体に密着している子どもにとって、身体のリズム感覚は、存在の確かさの感覚に大きな比重を占めているのではないかと私は考えていたが、最近、三日間つづけてHと一日を過す機会があり、このことを考えることができたので記したいと思う。

Hは近頃発作が頻繁になり、ほとんど一日中室内で、それも三メートル平方位の空間で、立った姿勢で足踏みなど、身体を揺らして過すことが多い。外部から見ると単調で屈な生活のようにみえる。ところが一緒に時を過すと、その生活は実に変化に富んでいる。音楽が流れていると、きげんよく笑いながら身体を動かす。私も腰を下してHの動きに合うリズムを声にすると、Hもたのしそうに、Hの身体の感覚を共有できるように思う。Hはかならずしも音楽に合わせて身体を動かしているのではなく、Hの内部で身体の

リズムがさまざまに変化してゆくみたいである。音楽やリズムの感覚は、言語や文字によって表現できない部分が多いが、大ざっぱにHの動きを分類すると、次のようになる。

足を交互に上下に動かして足踏みをし、体を揺する。これはきげんのよいときの主要な動きのひとつである。同じ場所で足踏みをするだけであるが、前進のイメージがある。

身体の動きをとめ、頭を下に向け、片手を下方に伸ばして静かになる。これは気げんがわるいのではない。むしろ、動の感覚が静にかわり、気分が内向した瞑想の時ともいえる。

身体の動きをとめ、頭を上方に向け、腕を上方に伸ばしてゆっくりと動かす。このときは目も光の方に向い、口ずさむ音楽も自然に高音になる。下方への動きが低音部の音になるのと対照的である。

腕を水平に滑るように動かし、指先を見ながら身体を左右に半分くらいまわす。これは地平の眺望である。足踏みの前進リズムがある程度つづくと、動きが静止して、下方、上方、水平のイメージが挿入される。このほかに次のような動きがある。

左右を蹴るような動作を加えた足踏みをする。これはダンスの足の動きに似ており、前進のみでなくて踊るような遊びの気分がある。

両足をそろえてとぶ。これは上方への飛翔であらう。

足首を後に蹴上げるようにして足踏みをする。走行の前進である。

ひもを両手に持ち、両手を左右に引張ってひもを緊張させて張る。以前には、これはHの特長的な行為だったが、いまは両手は緊張していても、ひもはたるんでいることが多

い。目と手とひもとの間につくられる緊張した空間がゆるんできたといってよい。手の緊張が弛むと、ひもを揺らし、足踏み運動がはじまる。私はそつとHの掌をにぎる。そうすると、ときどき私の方に手をのばしてさわる。

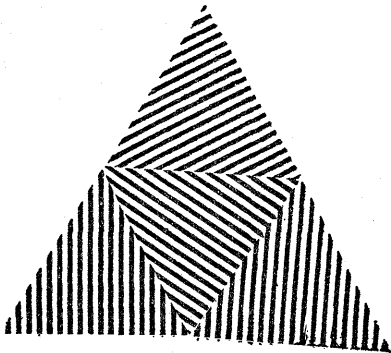
Hの身体の動きに合わせてリズムの調子をかえながら音楽を口ずさみ、声をかけたり手をとったりしていると、二、三時間はたちまち過ぎてしまう。Hの小さな世界に、前進あり、停滞あり、躍進あり、静寂あり、上方下方への動きがある。その動きの感覚を共有できるとき、わずか三メートル四方の空間が、変化に富んだものとなる。

普通の人の生活には、あまりにも多くの内外の刺激があつて、身体の内部で生起し変化する感覚に気付くことを困難にしている。Hのような子どもとふれると、リズムの感覚

は、外部の刺激からのみ生れるのではなく、身体をもった人間に内在することを認識させられる。子どもの固有の身体のリズムに合わせ、大人が音楽のリズムを加えるとき、子どもはそれをよろこび、大人のつくり出すリズムを共有する。こうして、原始的な身体感覚に、文化としての意味が付与される。

発作によってリズムがくずれる

午後になって、Hは何かきげんがわるくなり、床の上に立っていたが、私には全く突然に、真直な棒を後に倒したように、Hは後向きに床に倒れ、大きな音を立てた。激しく泣いた。家にいてもこういう発作が毎日起るといふ。Hにとっては、突然頭を殴られ、突き倒されたようなものだろう。身体の内部的できごとだけでも、Hの身に覚えのないことで、突如襲いかかる外的できごとである。い



そいで抱きかかえると、私に抱かれて泣きつづける。身体的生理的障害をもった子どもの運命的なできごとである。本人にとっては不可解な瞬間だろう。少し前までの人間的秩序の世界が、発作という外的衝撃によって崩壊し、Hの世界は混乱の状態に陥る。しかし、その中でも、間もなく、私に抱かれながら、自分の頭を壁や机に軽く何度かぶつけてみる。自分の頭の中に、いま突然起ったことは何だったのだろうか、確かめているみたいである。生理的に受動的に起ったことを能動にかえることによって、自分の秩序を回復しようとする試みのように思われる。一時間くらいでまた笑いはじめる。

次の日に発作を起したときは、足踏みの前進リズムの最中だった。Hのひざが私の足にほんの一寸ぶつかった。Hは驚いた表情をし、動きが一瞬止まり、そこから発作がはじ

まった。私に抱かれてぎくぎくとふるえ、激しく泣いた。椅子に腰かけていた私の足にHの方からぶつかったのだが、Hにとっては、外部の衝撃によって突然身体感覚による内的世界が乱されたのだろう。内的世界と身体感覚の世界とはHにとっては同一であり、驚きがひきがねとなって発作となった。目や耳の感覚世界での刺激によっては発作は起らない。前進し躍動する身体感覚の源であるひざがぶつかることにより、発作がはじまった。Hは手足が緊張し、泣きわめき、混乱しながらも、壁に頭をぶつけてみる。

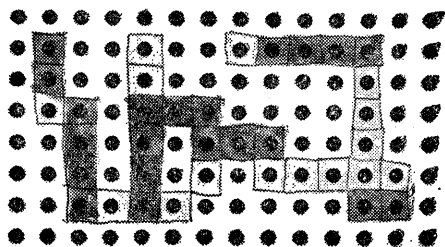
三日目には、発作が起きる前に機嫌がわるくなり、私の手をひきにきて、私を立たせたので、私も注意していた。そのうちに私によりかかり、ぎくぎくと発作がはじまった。私に抱きついて泣いていたが、私によりかかりながら収まった。四十分もたつと機嫌がよく

なり、前進足踏みのリズムがまたはじまった。

リズムの中でも大人も一緒にいる

このような発作による内的世界の秩序の混乱とその回復の過程は、普段Hの面倒をみている大人には熟知のことかもしれない。たまに、三日間ではあっても、一緒に時を過した私との間で、衝撃の受け方にも、混乱からの回復の仕方にも変化の過程があることを考えると、発作という身体的生理的できごとも、保育と関係が深いことがわかる。最初は、子どもが不意に襲われる衝撃に大人も驚くのだが、生理的のみならず精神的にも混乱の中にある子どもを抱きとめてその時を一緒に過すことにより内的秩序を回復することを体験する。

こういうことを考えると、発作という生理



的に運命づけられた衝撃も、単に生理的病理とのみ考えるのではない。その障害をもちながらも保育によって生活しやすくなると考えた方がよいだろう。発作のあと、頭を自分で壁にぶつけてたしかめるのも、長年にわたる両親やその他の大人たちの保育から生み出された本人の精神的ゆとりであろう。

再びとりもどしたリズムと存在

身体感覚の世界に生きている子どもにとっては、身体のリズム感覚はとくに重要な意味をもつであろう。前進の感覚、静止して下方に思いを向ける感覚、上方の光に向って体を伸ばす感覚、水平に腕をまわして眺望の空間をつくる感覚、緊張と弛緩の空間をつくり出す感覚等は自分の身体のリズムに伴う体験である。普通の大人も、一日の中で気分の浮き沈みを体験するのであるが、それらは外部の

できごとによって左右されることが多い。しかし、その最初は、ごく幼いときのこのような身体感覚にその源があるのかもしれない。この中から前進の感覚を例にとっても、大人の生活の無意識の層で、これは重要な役を果している。そのことは特殊な場面を考えてみるとわかる。車が渋滞して全く動かないときにはたとえ短時間でも耐えがたく感じられる。少しでも前進していれば時間を過し易い。精神的な面でも、困難はありながら前進している感覚が生活を支える。たとえ安楽でも前進感がないときには生活は耐えがたい。どんな子どもでもその点は同様なのである。

外界の認識が成立していない発達段階において、生命的な存在感は、身体のリズム感覚と密接に結びついているように思われる。

(愛育養護学校)

緑が目にしみるようです。五月の風に誘われて外に出たくなるもの。生きる物すべてが、エネルギーに満ち輝やいて見えてきます。

ふといつも通りなれた道ではなく、ちょっと遠まわりをしても、今まで通ったことのない道を歩きたくなりました。毎日生活をし、見馴れた町が、たった一本道をずれただけで、全く別の町にいるような錯覚におちいり、ちょっとした、ごくさやかな冒険気分になってきます。

こんな所にこんなものがあったとか、いろいろ発見があるものです。しかしこれも、絶対に、家にとどろ着く自信があるからできることかもしれません。夕暮れ時、近道のつもりで選んだ道が、思ひも寄らぬ方向へと続き、全く見知らぬ風景があたりをかこむ時、子供ならずとも、不安になってきます。

子供の頃、友達と遊んでいて、ちょっと先に帰ろうと、家路を急いだ時、踏み

込んだ道を一本まちがえて、どうしたらいいのかわからないパニックにおちいたことがあります。通りかか人も、見たことのない人。通りを進めば進むほど、どんどんわけのわからぬ町にはいつてゆくようで「このまま家に帰れなかつたらどうしよう。」と不安はつのるばかり。半分泣きながら、それでも歩かないと思ひ、進んで行きました。家々には、あかりがともし、なにやらおいしそうな臭いまでして来ます。「おかあさん。」と、小声で何度も呼びながら歩きました。

やっと知っている所に出た時の喜びは、何ともいいがたいものでした。

今でも時々道に迷います。それにもこりず何故か、また別の道を歩きたくなります。病気でしょうか。

(蒼)

幼児の教育 第八十五巻 第五号

五月号 ◎

定価四〇〇円

昭和六十一年 四月二十五日 印刷
昭和六十一年 五月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子
発行人

東京都文京区大塚二ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所フレイベル館にお願いいたします

*万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。

微妙で大切な保育のカンどころを、
読みとりましょう。



幼児をのばす

指導のポイント シリーズ〈全10巻〉

B6判・平均208頁
セットケース入り
セット定価9,600円

保育をするに当たって、保育者としてこれだけは身につけておきたい基礎的な考え方や、保育のおさえどころを解説したものです。保育目標を達成するための保育計画作成という大きな仕事に対して、初心者に分り易くするために、領域的な考え方を取り入れて、作成方法をまとめた実践例つき指導書です。

| | |
|--------------------------|----------------------------|
| ①保育の視点—ここがポイント 海 卓子・著 | ⑥自然の指導—ここがポイント 小山孝子・著 |
| ②指導計画—ここがポイント 高杉自子・著 | ⑦ことばの指導—ここがポイント 阿部明子・著 |
| ③絵画の指導—ここがポイント 林 健造・著 | ⑧ごっこ遊び—ここがポイント 笠間典美・著 |
| ④音楽の指導—ここがポイント 早川史郎・著 | ⑨園 行 事—ここがポイント 仲田あつ子・著 |
| ⑤体育の指導—ここがポイント 三宅邦夫・著 | ⑩母 親 対 応—ここがポイント 本吉園子・著 |

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

ピアノえほん ふしぎなポケット

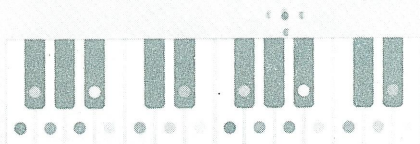
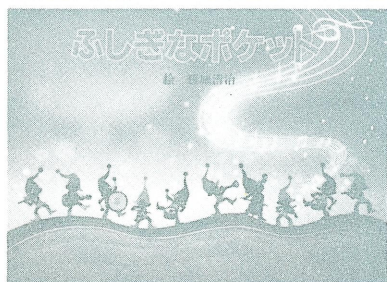
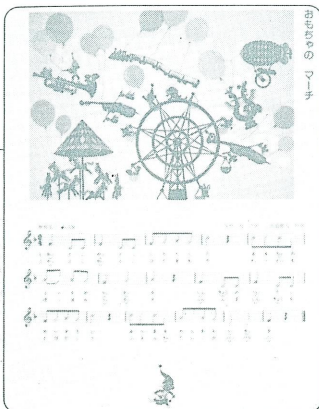
ひとりでも、みんなでも、弾いて遊べるピアノ絵本。

★
IC
ピアノつを
★

定価3,000円

全7曲入り

- おはながわらった
- ふしぎなポケット
- おもちゃのマーチ
- とんでったバナナ
- ジングルベル
- サッチちゃん
- もりのくまさん



五大特色

- 1 ピアノと絵本の組み合わせ
- 2 色でわかる音符
- 3 持ち運びが簡単
- 4 四拍子そろった楽しさ
- 5 音譜交換ができる

- ★短くて簡単な曲も入っていますので、はじめてピアノを弾くお子さまでも、さぐり弾きを楽しめます。
- ★曲目は軽快なリズムカルなものを選びました。ピアノになれたらチャレンジしましょう。
- ★どんな曲でも弾けるように、鍵盤は24鍵と音域の広いものを使用しました。

ピアノえほん 第1集
とんぼの めがね 発売中 定価3,000円

ピアノえほん 第2集
ふしぎなポケット 発売中 定価3,000円

推薦のことは



女優
竹下景子

こどもが授けられた時から、わたしの生き方は本質的には変わっていないけれど、やはり「母親になるんだな」という、うれしい覚悟というか責任を感じています。

音の世界には小さい時から触れさせた方がいいと聞いていますから、子どもが生まれたらこのピアノ絵本を与えたいと思います。このピアノ絵本は音色もいいし、絵にも夢中になってしまえそう。軽いから手でもって公園へも行けるし、車の中でも演奏できるし。でも、こどもはもついろいろな遊び方を発見するかもしれない。もちろん、わたしも推薦します。

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレール館